

# 四ツ谷用水の周知と継承のための提言

平成 25 年 3 月

## 四ツ谷用水再発見懇話会

慶長 6 年（1601 年）伊達政宗公は、三方を山に守られ、急崖を有する広瀬川を外堀とする自然の要害である青葉山に築城を始め、同時に城下町の建設にも着手しました。当時多くの城下町が水害対策に多大な労力と費用をかけていましたが、政宗公が城下町に選んだ広瀬川対岸の地は、段丘崖により川の氾濫による洪水や津波の被害を心配する必要はありませんでした。



この地に利水と排水の便の良い城下町を作るため、政宗公が家臣川村孫兵衛重吉に命じて作らせた人工河川が「四ツ谷用水」です。四ツ谷用水は広瀬川上流（郷六）の堰で取水し、縦横に巡らされた水路で城下町を潤し、防火用水・生活用水・農業用水として、さらに東部の低湿地での排水路として人々の生活を支えました（総延長約 44 k m）。

藩政期より人々の暮らしを支え城下の環境を整えた四ツ谷用水は、明治に入り道路の利便性が重視されると、水路の移設や道路側溝化が無計画に行われました。このため管理不足で汚水が滞留し、衛生上大きな問題となりました。明治 31 年（1898 年）に始まった下水道の整備に伴い、それまでの開渠から暗渠化・埋め立て化が進み、その姿を消していきました。最後に残った本流も、昭和 30 年代半ばの県工業用水道設置に伴い箱型の水路となりました。現在では、わずかに残された貴重な遺構とその風景により、往時の四ツ谷用水を偲ぶことが出来るのみです。

「四ツ谷用水再発見懇話会」は、かつての仙台の緑を育み市民生活を支え、杜の都の礎として重要な存在であった四ツ谷用水を広く市民に知っていただき、その記憶を将来の世代に継承する手法について検討することを目的として、平成 22 年 9 月に設置されました。

平成 25 年 3 月まで 8 回の会議を開催し、市民参加のフォーラムやイベントを開催してまいりました。

これらの成果を踏まえ、四ツ谷用水を周知・継承するための手法を、以下のとおり「もの作り」「しかけ作り」「しくみ作り」の三つの観点から提言します。

## 1. 四ツ谷用水の周知と継承に必要なもの作り

現在、目に見える形で残っている四ツ谷用水の遺構はほんの一部に過ぎません。多くの人々に四ツ谷用水の重要性を認めていただき、その記憶と価値が次世代に受け継がれていくためのもの作りが必要です。

### ● 常設コーナーの設置

多くの人々に広く四ツ谷用水を知っていただくために、環境交流サロン等、市民が気軽に立ち寄ることができ、NPOや市民活動団体が活動拠点としうる場所に、四ツ谷用水の常設コーナーを設置することを提言します。

四ツ谷用水を紹介する展示やパンフレットは、支流・枝流を含めた四ツ谷用水の全体、さらには御舟曳堀や貞山運河、六郷堀・七郷堀も含めた仙台の水のネットワーク全体を意識できるものとするのが大切です。そして、これらの水路が藩政期より仙台の城下町を潤し、“水と杜の都”と生活用水や水車を利用した産業、水運等で人々の暮らしを支えてきたことが伝わるものであることが大切です。

### ● 遺構の保存と、標柱や説明板の設置

広く市民に遺構の存在を知っていただくために、支倉堀跡や洗い場跡のような現存する遺構をより良い状態で保存するとともに、現在、遺構に設置されている標柱の改修や、新たな説明板の設置を進めることを提言します。

また、これらの遺構とまちの見所を組み合わせた散策ルートを開発し、観光資源としてアピールすることで、市民の方々も自慢できるまちの魅力を再認識することができ、市外からいらっしゃった多くの方々にはかつての仙台の姿や歴史をより深く理解していただけるものと考えます。

## 2. 四ツ谷用水の周知と継承に必要なしかけ作り

仙台市全域における四ツ谷用水の認知度は、まだ十分に高いとは言えません。そこで、より多くの人々に四ツ谷用水を知っていただくためのしかけ作りが必要です。

### ● 資料のデジタル化とウェブサイト作成

四ツ谷用水のウェブサイト作成を提言します。

写真や地図は視覚的に分かりやすく、子どもから大人まで幅広い年代に気軽に当時の四ツ谷用水が流れる街並みに関心の目を向けていただき、楽しく理解を深めていただくための効果的な資料です。これらの資料の活用方法として、四ツ谷用水のウェブサイトを作成し、そこでデジタル化した資料を公開することは非常に有効です。デジタル化により貴重な古い資料が風化することなく継続して活用されることが可能となり、ウェブ上で公開することで、資料の継承のみならず国内外に広く発信できるとともに、多くの人々にとって手軽な閲覧と検索が可能となります。

さらにデジタル化は、市民団体が所有する多くの貴重な研究資料の発展的活用をもたらします。たとえば、現在と当時の地図の重ね合わせや、四ツ谷用水のある街並みのCGによる再現等によって臨場感や立体感を得やすくすることも可能となります。さらに、水路構造や建設技術の研究データとしての活用により、かつての人々の技術や知恵をより深く掘り下げることができます。

また、このためにも、四ツ谷用水とともに暮らした人々から、消えゆきつつある四ツ谷用水の記憶を早急に収集し、記録することも必要です。

#### ● イベントの拡充と継続

懇話会設置後、フォーラム（バスツアー＋シンポジウム）、バスツアー、歩く会、意見交換会を開催してきました。フォーラムには200名以上の立ち見が出るほどの参加者がありました。また、その他のイベントの大半では定員を大きく上回る応募があり、その関心の高さがうかがわれたことから、今後もより多くの人々のニーズにこたえるべく、イベントの回数や規模を拡充することを提言します。

これらのイベントで初めて四ツ谷用水を知った方も少なくありません。四ツ谷用水を知るきっかけ作りとして、また、より多くの人々が四ツ谷用水を身近に感じその魅力に触れるためのこれらイベントは大変効果があったものと評価しています。こうしたことから、地域住民やNPO等が主体となって、親しみやすいイベント活動を行政と協働で継続して行っていくことを提言します。

#### ● 教育現場における工夫

イベントの参加者は高齢者の割合が高く、幅広い年代に四ツ谷用水について知ってもらうためには、若い世代への働きかけが必要です。八幡地区の小中学校では、これまで、四ツ谷用水をテーマとした総合学習を行っています。市内の小中学生にも四ツ谷用水を知ってもらうために、副読本に四ツ谷用水の説明を加えたり、四ツ谷用水の学習プログラムが社会科や総合学習等で積極的に活用されるよう、教育現場における工夫を望みます。

### 3. 四ツ谷用水の周知と継承に必要なしくみ作り

これまで述べた「もの作り」と「しかけ作り」を効果的に行うためには、それらを支える「しくみ作り」が必要です。

- 四ツ谷用水を支える市民・企業・行政の体制作り

様々な取り組みを進めるには、サポーターの養成を含め、企業や市民の力を活用した四ツ谷用水を支える体制作りが不可欠です。

また、四ツ谷用水への市民意識の盛り上がりがさらに広がるように、地域住民やNPO等の主体的な取り組みに対して、行政による支援を継続するとともに、これまで以上に行われるよう提言します。

本提言により、四ツ谷用水の周知と継承の手法、四ツ谷用水の活用について一定の方向性を示すことで懇話会設置の目的を達成できたことから、平成25年3月末日をもって、平成22年9月に設置した四ツ谷用水再発見懇話会を終了いたします。

四ツ谷用水は仙台の歴史的遺産であるとともに、杜の都仙台の基盤の一つであり、まちづくりの資産でもあります。また、東日本大震災において、都市における水の大切さも経験されたところです。このような観点も活かしながら、今後も、各委員がそれぞれの立場から四ツ谷用水のさらなる周知と継承を目指した活動を続けてまいりますので、市長におかれましては本提言の内容をおくみとりいただき、今後の仙台の良好な環境の保全・創造と魅力あるまちづくりに活かしていただくようお願い申し上げます。

平成25年3月31日

仙台市長 奥山 恵美子 様

四ツ谷用水再発見懇話会 座長 佐藤 正基